魔風一族

海音寺潮五郎

光風社書店版

風魔一族

昭和四十一年二月二十五日　印刷
昭和四十一年三月　十五日　発行

定価　四〇〇円

著者　海音寺　潮五郎
発行者　豊島　澂
印刷者　菅生定祥

発行所　株式会社　光風社書店
東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京（九二）〇二三八番
振替東京一二九一三番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

女キャラバン　七
恋慕甚句、　一九
二人甚内　三三
とびさわ　四五
落日の丘　五七
あらしの前　六九
黒風白雨　八一
夜の底に　九三
高坂甚内　一〇四
甲賀の忍者　一一六
ボウフラと啞　一二八
家康、箱根を越ゆ　一四〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

運不運　一五二
訴人の値段　一六四
恋の彩雲　一八九
女の市場　二〇〇
慣れる　二二三
河原もの　二三六
売買問答　二四〇
泥棒だらけの江戸　二五二
伊賀衆小屋敷　二六四
慰安婦部隊　二七七
約束の楯　二九〇
やがて秋晴　三〇三

裝幀　中尾　進

風魔一族

女キャラバン

一

しつっこい蠅だ。追っても、追っても、かえってきて、顔をせせり立てる。起きて、たたき殺せばいいのだが、眠くて、眠くて、起きる気がしない。

首をふったり、寝がえりを打ったり、いろいろしていたが、やりきれなかった。

「ええい！　くそ！」

どなって、起き上った。

ねむい目をこすりこすり、手拭いを取って、たたき殺そうとして、あたりを見まわした。おそろしい数の蠅だった。目の前の宙を、クルクル、クルクル、まわっているのが、蚊柱（かばしら）のようだった。

あきれて、血をそそぎこんだような赤い目で、見ていると、露地を近づいて来た足音が、入口でとまった。

「庄司さん。庄司さん」
と、呼んだ。
三十年輩の、四角な、あごと、クリクリした目をもった、精悍な顔をした、その男は、急には返事しなかった。用心深い目をして、耳を立てていた。近くの畳の上にころがっていた刀を、左手にひきよせた。
「甚内さん、いないんですか」
外ではまだ呼んでいる。
やっと、声の主が誰であるか、わかったらしい。緊張をといた。答えた。
「おお」
「やはり、いたんですね」
言いながら、入って来たのは、武家奴だった。大きな紋のついた紺麻のカンバンに、手綱ぞめのしごきを前結びにし、銀のヒルマキしたさやに、大きな角つばをはめた、大わきざしをさしていた。毛だらけの太股はむき出し、素足のはだしだったが、黒革のきゃはんをはいているのがかいがいしげだった。
年輩、二十二、三、ほお骨が荒れ、目つきがたけだけしく、いかにも強そうだった。
「留守ではなさそうだと思ったんだが、へんじがないので……」
と、いいながら、上りがまちに腰をおろした。
「昼寝していた。いい気持で寝ていた」
庄司甚内と呼ばれた主人は、生あくびをかみころしつつ、こたえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

「庄司さん、知っていますか、早川の川口に、へんな連中が来ているのを」
「へんな連中て、どんな連中だ」
「一口に言えば、クグツですね。しかし、クグツじゃないんだそうです。女歌舞伎と言うんだってますがね。天幕を張って、セブっているところを見ると、クグツそっくりなんだけど、クグツにしては、男の数が少なすぎます。めっぽう女が多いのです。その女が、皆すばらしいベッピンと来ている。へへへへへ、やっぱり、クグツじゃないんでしょうね」
「それで、なんのためにこちらに来たんだね」
「歌舞伎とかいうものを、見せるんだってますがね。なあに、おどりみてえなものだそうです」
「おどりって、風流おどりか、申楽か」
「さあ……」
「いつから来ているのだ」
「今朝方、西の方から、箱根をこえて来たそうですが、もう、きれいに天幕をはってセブってますよ」
甚内は、黙っていた。思案しているようすだった。
「行かねえんですかい」
「行ってみようか」
両手に手拭いをひろげて、クシャクシャと、顔を拭いた。立ち上って、帯をしめなおした。大小を腰におとした。押入れから、熊の毛皮の胴籃（腰下げの巾着）を出して、中からつまみ出した小銭を、バラリと、奴の前に投げた。

奴は、チラリとそれをみて、不平そうに、口をとがらせた。
「こんだけですかい。この暑いのに、せっかく知らせに来たのに」
「海のものになるか、山のものになるか、わからない。獲物しだいで、また、礼はするよ」
ムッツリしたようすで、甚内は胴籃を腰にはさんだ。
外は、やけつくような日盛りだった。両側の家が、黒い陰をおとして街道は、日がクラクラするほど、真白に灼けている。
途中で、奴とわかれて、甚内は一人、その真白な道を歩いて行った。
この小田原の領主であった北条氏がほろんでから、もう九年になる。その年に、徳川家が、関八州四百万石の領主となって、江戸に入り、小田原は、その家臣である大久保忠世の城下となって、今日におよんでいる。
北条氏の時代、この土地は、関東地方における最もにぎやかな都会であった。政治的にも、文化的にも、中心地で、髪の結いぶり、着物の着かたまで、小田原風といわれて、関東一円の人々は、皆、これにならったほどであった。
今では、それほどのことはない。繁栄は、年々に、江戸にうばわれつつあるが、関東の関門にあたっているという地勢上のこともあって、かつての名ごりは、まだ濃く、町家など、さして昔とかわったようには見えなかった。
甚内は、北条氏の遺臣である。先祖代々の邸あとも、この土地にある。今は、大久保家の、なんとやらいう武士の住いになっている。
けれども、今の彼には、なんの感傷もない。その屋敷あとのそばを通ったが、ふりかえって見も

しなかった。日の照りかえしている、その練塀にそった通りを、ばかばかしく暑いな、と、少し腹立たしく思っただけだった。

二

源を箱根の芦の湖に発する早川は、足柄山塊と箱根山塊の翠巒の間を、泡立つ急湍となり、たたえる青潭となりつつ流れて、風早にいたって、ようやく緩、板橋にいたってさらに両岸がひらけ、小田原の南部で、海に入る。

汗をふきふき、この川の堤防の上に立った甚内は

「ホウ」

と、言って、河原の一部を見つめた。

真昼の日が、ギラギラと照りわたっている。そこには、大きな天幕が張られていた。いろいろなボロギレをつぎ合わせたものだが、明るく日光を照りかえしているので、ちょっと見たところでは、白一色のようであった。

ボロギレをつぎ合わせてこしらえてあるところは、クグツのセブリに似ているが、クグツのは、こんなに大きくはない。せいぜい、五、六人寝起きの出来るくらいの、カマボコ型のやつが、多くて二十ほども集結しているにすぎない。

「やはり、クグツとはちがうようだ」

ムッと、草いきれの顔をうってくる堤防の青草の間に、赤い土肌をむき出しにして、つづいている小径づたいに河原へ出た時、ドドン、ドン、ドン、ドン、と、太鼓のひびきがおこり、笛の音が、

軽快な調子で、ヒューラ、ヒューラ、ヒュラ、と、つづき、さらに、絃の音が、ビビン、ビビン、と、湧きおこった。

天幕の中からだった。

甚内は、音曲の心得がない。しかし、その音曲は、知らず知らずに、心を浮き立たせ、足どりをはずませる軽快さと、にぎやかさと、滑稽さをもっていた。

特に、絃の音が、耳に立った。澄んでいるところは、琴に似ていたが、高く張っているところが、ちがっていた。といって、琵琶でもなかった。琵琶なら、相当に調子は高いが、これほど澄んでいない。

甚内は、知るかぎりの絃楽器を思い浮かべてみたが、そのいずれにもあてはまらなかった。

知らず知らず、心をなやましていることに気づいた。苦笑した。

「まあいい、おれはそんな用事で来たのじゃない」

天幕の入口で、ひたいににじむ汗を拭いた。胸をかき合わせ、腰の刀をただし、威容をととのえた。胸を張って、ノッシノッシと、足音をひびかせつつ、中へ入った。

大きくて、天井の高い天幕の中は、ヒヤリとするほどすずしかったが、幕をすかしてさしこむ日の光のために、かなりに明るい。

甚内は、中ほどまで進み入って、足をとどめて、グルリと見まわした。

セブリも、こうまで大きければ、壮大といってよい。縦横に丸太を組み、綱をはりまわしたのを骨組にして、その上に幕を張ってあるのだが、すき間から青い空がのぞき、ゆるやかに風にそよいでいるその天井の高さは、たしかに四、五十丈はある。大殿堂の内部にある感じだった。

そのひろい幕内の、大部分は、なんにもない、河原の砂利原だが、正面に、一段高く、板じきがあった。板と、丸太と荒なわで出来ている、板じきである。これが舞台で、砂利原が客席なのだと合点された。

甚内は、かなりに気をのまれた。しかし、すぐ、フン、と、鼻の先で笑った。ひるみかかる気力を、相手を軽べつすることで、ふるいおこそうとしたわけだった。

舞台にも、客席にも、人影は見えないが、正面の幕のうしろに、多数の人のけはいがある。キァキァいう女の声や、笑い声がにぎやかにしていた。音曲も、そこからひびいてくる。

甚内は、なお進み、舞台にとび上って、大音にさけんだ。

「頼もう」

聞こえなかったのか、返事がない。浮き立つような調子で、音曲もつづいていれば、話し声や笑い声もつづいている。甚内はムッとした。

「頼もう。誰かおらんか！」

またさけんだ。その上、ドシン、ドシンと、板じきをふんだ。

音曲の音が、ハタとたえた。話し声も消えた。

（それみろ！）

甚内は、心中ほくそえみながらも、こわい顔をして、グイ、と、幕をはぐった。

幕のうしろには、一間ほどのへだてをおいて、また、幕があった。

二つの幕にはさまれた、その長い廊下には、誰もいない。甚内は、そこに入ったが、妙な不安を感じた。その不安をおしきるためだった。

「誰かおらんか！」
と、大きな声でさけんだ。
「へい！」
思いもかけず、つい間近かで、返事があった。甚内は、飛び上るほどおどろいた。覚えず、刀のつかに手をかけていた。
目の前に、垂れた幕が、ムクムクとうごいた。かかげられたその下から、ヒョコヒョコと、出て来た者があった。
ひと目には、人間の胴体だけが、斬り口を下に、肩をゆすりながら、ゆらぎ出たかと見えた。子供のような身長のくせに、顔は四十男だ。しかも、太い眉と、隆い鼻筋と、キッと結んだ唇とを持った、実に立派な顔だった。
「なんだ、きさまは？」
甚内は、完全に、どぎもをぬかれていた。
「あなたこそなんです」
一寸法師は、濃いたくましい眉を上げて、大きな、光る目で見上げた。不敵な感じだった。
「おれは、この小田原に住いしている、庄司甚内というものだ。この一座の頭に会いたい。取りついでもらいたい」
「どんな用事です」
「一口に言える用事ではない。取りついでくれ」
一寸法師は、その濃い眉をひそめて、また、ジロジロと、甚内を見上げながら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook